

明治学院歴史資料館

News Letter

No.11

2019

目次：

- 1 明治学院日本はじめて物語第4集のご紹介
/松岡良樹(元研究調査員)
- 2-3 明治学院に残る歴史的建造物-インブリー館・チャペル・記念館-
/青木祐介(横浜都市発展記念館 副館長)
- 4-5 《資料紹介》佐々木邦からの手紙
/松本智子(研究調査員)
- 6 山田幸三とその日記について
/石崎康子(研究調査員)
- 7 回顧談-沖縄からの留学-/屋我良明
- 8 2019年度の主な活動、その他

明治学院日本はじめて物語第4集のご紹介

キリスト教文化と自由な学風 松岡 良樹(元研究調査員)

「日本はじめて物語」第4集では「キリスト教文化と自由な学風」として、明治学院から花開いた成果をパネル展示として紹介しています。是非ご高覧ください。

(1) 日本はじめての古式パイプオルガン

明治学院礼拝堂に設置されているパイプオルガンは、2045本のパイプを持ち、バッハの時代の製作技術で作られた、世界で4台目、日本で最初のオルガンです。

(2) 第二のマルコーニー多極真空管を在学中に発明

日本の誇る世界的発明家の安藤博は世界に先立ち多極真空管を明治学院在学中に17歳で発明しました。トランジスタの発明に匹敵する快挙であり、無線通信の世界を大きく広げました。NHK開局発起人ともなり、テレビジョンを映画放送装置として特許を取っています。

(3) 日本最初のオラトリオ《ヨブ》

明治学院の豊かな音楽の伝統を土壌としてオラトリオ《ヨブ》が安部正義によって作曲されました。2019年6月にはモスクワのルーテル大聖堂でも海外初演されました。

(4) 口語訳聖書の初めて

明治学院長都留仙次と学長村田四郎が中心となって戦後に訳した口語訳聖書は、ヘボンとS.R. ブラウンの明治訳に続く二度目の聖書全文和訳として、戦後日本のベストセラーとなりました。

(5) ギリシア語本文から初めて聖書を和訳

神学部卒の永井直治牧師はギリシア語を研究して外国人宣教師の手を借りずにギリシア語本文から聖書を初めて翻訳しました。語学力だけでは聖書翻訳は困難であり、日本人が神学的理解を深めたことを示す偉大な足跡です。

(6) 日本初のユーモア作家

明るい笑いと風刺の作風の佐々木邦は日本最初のユーモア作家であり、ユーモアクラブを創設し、初代マーク・トゥエイン協会会長となり、明治学院と青山学院を題材にした小説『凡人伝』を書きました。

(7) モダンピアノの日本はじめて

金属フレームと鋼製弦を持つ現在のようなモダンピアノは、創設者の1人、S.R. ブラウン牧師により日本に持ち込まれたとされています。1859年12月の年の瀬でした。

(8) 『キリスト教綱要』と『ダンテ全集』

中山昌樹は宗教改革に最も影響を与えたといわれる、キリスト教三大著作の一つジャン・カルヴァンの『キリスト教綱要』全文を1934年にラテン語から日本語に訳出しました。当時のアジアでは全訳は初めての業績でした。またダンテの『神曲』1万4233行も訳出し初めてのダンテ全集を刊行しました。原稿は彼の文庫と共に図書館に所蔵されています。



日本はじめて物語第4集
パネルより 永井直治

明治学院に残る歴史的建造物 —インブリー館・チャペル・記念館—

青木 祐介(横浜都市発展記念館 副館長)

白金キャンパスに残る 3 棟の歴史的建造物（インブリー館・チャペル・記念館）は、1990 年代からのキャンパス再開発のなかで、今日の歴史的評価が定まった。1998（平成 10）年には保存修理工事を終えたインブリー館が国指定重要文化財となり、2002（平成 14）年には 3 棟が東京都の「特に景観上重要な歴史的建造物等」に選定された。3 棟がたどってきた歴史は、白金キャンパスの環境形成史そのものである。

◆インブリー館（旧宣教師館）

木造 2 階建てのインブリー館は、明治学院の草創期に建設された洋風住宅である。1887（明治 20）年 1 月に設立認可を受けた明治学院は、白金の地にキャンパスを整備するが、普通学部校舎兼講堂（サンダム館、明治 20 年）、寄宿舎（ヘボン館、明治 20 年）などの施設とともに、外国人宣教師たちの住宅がキャンパス内に建設された。

インブリー館はそのうちの 1 棟で、1889（明治 22）年頃の竣工と推定される。同時代のディレクトリー（外国人住所録）から、当初この住宅には宣教師のマコーレイが住んでおり、インブリーは 1897（明治 30）年以降に住み始めたと考えられる。



インブリー館（旧宣教師館）

インブリー館の設計者は明らかではないが、その住宅様式からは、同時代（19 世紀後半）の本国アメリカの住宅建築との強い関連性がみられる。当時アメリカでは機械製材の発達と相まって、安価かつ大量に住宅が建設されるようになっており、それを支えていたのがパターンブックと呼ばれる住宅のデザイン集であった。

インブリー館はじめキャンパス内の宣教師住宅も、こうしたパターンブックをもとに宣教師自らが日本人大工に指示を出して、多彩な細部をカタログ的に組み合わせることで建設された可能性が考えられる。

◆チャペル（礼拝堂）

煉瓦造 2 階建てのチャペルは、前身のミラー記念礼拝堂（明治 36 年）が二度の地震被害で解体されたことを受け、近江八幡を拠点とする建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計により、1916（大正 5）年に竣工した。ヴォーリズ自身も 1919（大正 8）年に、このチャペルで生涯の伴侶である一柳満喜子と結婚式を挙げている。

ヴォーリズはミラー記念礼拝堂の資材を再利用して建設費を抑えたとされ、実際に、南側外壁の一部に再利用とみられる煉瓦を確認することができる。その後チャペルは、関東大震災で被災した際に外壁にバットレス（控壁）が追加され、1931（昭和 6）年には東西の袖廊が増築されて、ほぼ現状の外観となった。

教会堂は天井を張らないオープン・ルーフの形式で、なかでもハサミ型に小屋組を構成するシザーズ・トラスが大きな特徴である。ヴォーリズが設計した教会堂でこのシザーズ・トラスを採用したものは、明治学院チャペルを含めて 1916 年から 1919 年の時期に集中しており、当該期に事務所に在籍していたヴォーゲルの関与を示唆するものである。



チャペル（礼拝堂）

◆記念館（旧神学部校舎兼図書館）

煉瓦造2階建て（一部木造）の記念館は、1890（明治23）年6月に、神学部校舎兼図書館として完成した。当時在学中であった島崎藤村は、小説『桜の実の熟する時』のなかで「まだペンキの香のする階段を上って行って二階の部屋へ出ると、そこに沢山並べた書架がある」と2階に設けられた図書室の様子を描いている。

この図書室については、宣教師アメルマンが留学中の井深梶之助に充てた書簡（明治学院大学図書館所蔵）で、計画変更により1階から2階へ移されたことが略図とともに報告されている。2階の間仕切壁を撤去して空間を広く取り、大きな荷重のかかる図書室を設けたことは、1894（明治27）年の明治東京地震での被害につながったのではないかと推測される。地震後、2階部分はドイツ人建築家ゼールにより木造に改造された。現在の記念館の外観は、このときのものを継承している。

記念館の設計者について『明治学院五十年史』は、「設計はランデイス教授であった」と宣教師ランデイスの名前を挙げている。一方で、アメリカ人建築家の設計とされる仙台神学校（現・東北学院）校舎が記念館に瓜二つの外観をもつこと、同時代に竣工した同志社大学神学館の設計者ゼールを紹介したのがランデイスであったことなどを考慮すると、当時国内において、会派を超えたミッション間の協力関係が背後にあったことが想定できる。その文脈でランデイスは指導的役割を果たしたということであろう。



記念館（旧神学部校舎兼図書館）

◆3棟が構成する景観

戦後の高度経済成長期のなかで、白金キャンパスは大きな転換点を迎える。1964（昭和39）年開催の東京オリンピックに備えて、前面の国道一号線（五反田～清正公前）が拡幅されることとなり、同年、拡幅範囲にあったインブリー館と記念館は、現在地へと曳家された。それまで中庭側を正面としていた記念館は、曳家に際して向きが90度変わり、正面を南に向けた現在の形となった。そして1966（昭和41）年に建築家宍戸實によって復元工事がおこなわれた。

こうしてインブリー館・チャペル・記念館の3棟の歴史的建造物が、親密な距離のもと向かい合う現在の景観が形成されるに至った。



歴史的建造物三棟（上から見た図）

本稿は2019年11月9日に明治学院記念館で開催された「洋風建築の声を聴く－明治学院の歴史的建造物を学ぶ－」での青木氏のご講演の内容をおまとめいただいたものです。

青木 祐介（あおき ゆうすけ）

東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。博士（工学）。横浜都市発展記念館副館長・主任調査研究員。専門は近現代建築史。近著に『死ぬまでに見たい洋館の最高傑作』（田中禎彦監修、エクスナレッジ、2012年）、『日本近代建築家列伝 生き続ける建築』（丸山雅子監修、鹿島出版会、2017年）など。

《資料紹介》佐々木邦からの手紙

松本 智子(研究調査員)

明治学院高等学部を1905(明治38)年に卒業し、小説家・翻訳家として名を馳せた佐々木邦が1964(昭和39)年に書いた手紙を紹介したい。手紙の相手は、高等学部でのクラスメート古川笈夫。古川は卒業後すぐの1905年5月19日、勉学のため横浜港から神奈川丸に乗ってシアトルに向う(注1)が、その後消息不明とされていた人物である。



明治学院高等学部の卒業生集合写真 1905(明治38)年

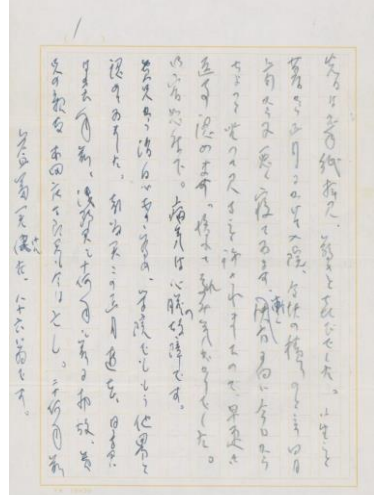
佐々木と古川の同級生には、後に学院長となる都留仙次もいた。前列左から、都留、佐々木、浅野一郎、古川、後列左から、熊野雄七、ポーン、オルトマンズ、ワイコフ。

1904(明治37)年のへボン館舎監室の『日誌』(注2)9月19日条には、へボン館中央部のモニター(舎監)であった古川笈夫が都合により辞めるため後任選挙が行われ、佐々木邦が当選したことが記されており、佐々木と古川はへボン館で寝食をともにした仲であったことも知られる。しかし、卒業後古川が渡米したため、交流もなく月日が流れたようである。

2011年古川氏のご親戚から古川氏の遺品として手紙や写真など13点が当館に寄贈され(注3)、そこに佐々木から古川に送られた手紙が4通(注4)含まれていたことにより、卒業から約60年後の2人に交流があったことが明らかとなった。手紙は1964年5月から約4ヶ月間、佐々木が亡くなる前月までのものである。今回はそのうち特に明治学院に関する内容が書かれた手紙を紹介したい。明治学院時代の友人や先生など、明治学院に思いを馳せる最晩年の佐々木邦の様子がうかがえる貴重な資料である。

◆佐々木邦からの最初の手紙

手紙のやりとりは1964年(注5)5月に突然始まる。



手紙の冒頭。手紙は原稿用紙2枚の表裏4頁にわたって書かれている。

先日はお手紙拝見、驚きと喜びでした。小生こと暮から正月にかけて入院、全快の積りのところ四月上旬から又悪く寝てゐます。漸く快方に向い今日からちょっと坐って見ること許されましたので、早速御返事認めます。後れてそのみ気がかりでした。御寛恕被下。病気は心臓の故障です。貴兄から消息なき為め、学院でももう他界と認めてゐました。都留君この正月逝去、日高君は五六年前、浅野君も十何年も前に物故、貴兄の親友本田庄三郎君も今は亡し。[欄外]益富兄健在、八十六翁です。

二十何年前に紀州新宮に旅した時、訪ねましたが、大阪へ出張して不在、新聞販売業で市の有者の由でした。小生は生きてゐますがもう八十一にて病弱になりました。著述をやつてゐます。自著自釈のものNew YorkのVantage社から出してゐますThe Reluctant Bachelorと申します。自叙風のもので。買って読んで被下。貴兄はfloristとして成功の由、どんな爺さんになったか、写真(御家族のも)御送り被下。此方からも送ります。貴兄存命のこと語る友なく残念です。

明治学院は立派な大学になってゐます、都留君は三年前まで院長を勤めてゐました。御存じの人は一人もゐません。井深の健君も亡くなりました、横山ガンクビ君は健在、当時普通科でしたから、御記憶ありますまい。S宮田も丈夫、生きてゐるのはこれぐらゐのもので。

小生の娘がアメリカ留学のまゝNewYorkの会社に勤めています。小生のThe Reluctant Bachelorはアメリカ Vantage Press, 120 West 31st Street, New York 1, N.Y. から出てゐます。場面はIndianapolisです。君によってIndianaの印象深くつい利用したと思ひます。小生は海外へ一切出ず、世間知らずです。返事がないのでどうしたのかと思つたでせう。病気にて動くこと禁じられてゐたのです。小生のところには五人子四人まで亡くなり、不幸この上もありません。戦死病死皆大きくなって取られました。今日はこれだけにして、又書きませう。御手紙被下。

五月十八日 佐々木邦

古川大兄

手紙冒頭に「先日はお手紙拝見、驚きと喜びでした」とあることから、古川が先に佐々木へ手紙を書いたようであるが、なぜ古川は佐々木に手紙を書いたのだろうか。その経緯を故平林武雄明治学院名誉教授が記した「佐々木邦先生の思い出」の中に見ることができる(注6)。

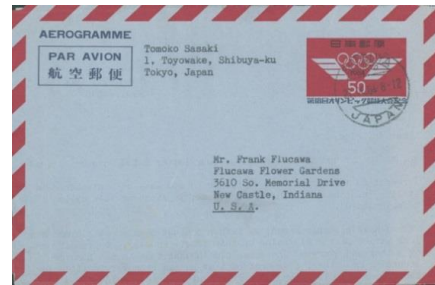
佐々木先生を最後にお訪ねしたのは、七月二日だった。その日は、インディアナ州で花を作っている古川笈夫という明治学院のクラスメートから来た手紙の話がされた。「この人は学院を卒業するとすぐ米国に行った人ですが、このごろ日本の旅行者に私の名をいったら、それは有名な文士になっていると教えられたそうです。六十年ぶりの手紙です」と懐しそうに語られた。

60年ぶりの手紙には、自らと家族の現状ほか、同級生であり明治学院の学院長も務めた都留仙次が正月に亡くなり、日高善一、浅野一郎、本田庄三郎、井深健次も既に他界したことなど、明治学院時代の共通の友人たちについて、その消息が次々と記されている。佐々木は、昔のことを語り合える友を手紙の向こうに思い浮かべつつ、懐かしい気持ちで筆を進めたことであろう。

◆もう1通の手紙

最後にもう1通手紙を紹介したい。日付は1964年10月21日。これは佐々木の四女とも子から古川に宛てた手紙である(注7)。とも子は、父邦が9月22日に心筋梗塞によって他界したことを古川に知らせ、これまでの手紙のやりとりと温かい友情に謝意を表している。何も知らない古川は佐々木に手紙を

送っており、とも子によると10月2日に佐々木家に到着したようであるが、残念ながら佐々木がその手紙に目を通すことはなかった。



この手紙の封筒の右上には第18回オリンピック競技大会、すなわち東京オリンピックの記念として五輪マークが印刷されている。オリンピック開幕は1964年10月10日。この18日前に佐々木邦は天に召されたのであった。

※今回紹介した手紙は明治学院歴史資料館展示室にて公開中。

(注1) 『白金学報』第6号(1905年7月、p97)

(注2) 当館所蔵、資料ID 1201711457

(注3) 資料寄贈の経緯については、明治学院歴史資料館「ニュースレター」Vol.2(2011年3月)所収「コラム明治期に世界に羽ばたいた明治学院卒業生」に詳しい。明治学院高等学部時代の古川は、1903(明治36)年1月に明治学院文学会の会長に選出され(『明治学院文学会記録』、当館所蔵、資料ID 1201711453)、のちに演説部の部長やベースボール部の部長もつとめている(『白金学報』第3号、1904年7月、p83)。また、クリスマス祝会で英語演説をする(『白金学報』第5号、1905年3月、p62)ほか、井深樞之助総理の渡欧送別会では生徒を代表して送別の辞を述べる(同、p73)などしている。

(注4) 寄贈資料のうち。当館所蔵、資料ID 1201970043～1201970046

(注5) 都留仙次が正月に亡くなったことなど手紙の内容から推定。

(注6) 『明治学院同窓会報』第13号(1964年12月)所収。

(注7) 寄贈資料のうち。当館所蔵、資料ID 1201970047

山田幸三とその日記について

石崎 康子(研究調査員)

当館がこのたび刊行した『明治学院歴史資料館資料集』（以下「資料集」）第16集では、1893（明治26）年から約4年間、明治学院神学部在籍した山田幸三（1873-1940）が記した2冊の日記を紹介した。

山田幸三が記した日記は、山武市歴史民俗資料館（千葉県山武市殿台）が所蔵する「東京都八王子市 山田幸信家文書」（以下山田家文書）に収められている。山田家文書は、旧遠州掛川藩士であり、同藩の上総国武射・山辺郡内へ移封後、松尾藩士となった山田家に伝わった文書である。

山田家資料によると、山田家は、初代山田幸政より掛川藩主の太田家に仕えており、5代幸寿は家老職を務めていた。掛川からの移封は、10代幸律の時である。

本資料集で紹介する日記は、幸律の長男山田幸三（山田家11代）が記したものである。幸三は、父幸律、母りゑの長男として、1873年7月20日に生まれた。千葉県山武市にある九十九里教会は、千葉県内で現存する最も古い教会の一つであるが、1880年代後半以降、旧松尾藩士族への信仰の広まりが教会を発展に導いたといわれている。会堂は1887年11月に建てられたが、幸三はその前年の1886年7月25日、父幸律、母りゑとともに、仮会堂において和田秀豊から受洗した。父幸律の希望もあり、明治学院神学部を受験し、1893年9月に入学、1897年3月、明治学院神学部を卒業している。卒業後、伝道志願者試験を受験するも合格せず、三井銀行に就職し銀行員としての生活を歩み始め、東京・大阪・横浜などで勤務した。1940（昭和15）年4月11日に66歳で死去している。

山田幸三の日記は、山田家資料のなかに、少なくとも1888年の「日記（第壱号）」など11冊が残されている。「資料集」第16集では、1893年の「二榎日記」と1894年の「今里日記」を紹介した。「二榎日記」は、上京した幸三が寄留した秋葉省像宅の住所である芝区二本榎西町に因み、「今里日記」は、幸三が1894年9月24日から年末まで寄留した小倉家のあった芝区白金村今里町の地名から名付けられたものと思われる（右写真）。

幸三が明治学院神学部に入學したころ、時代は大きく変わり始めていた。1889年2月11日、大日本帝国憲法が公布された。また日本政府が明治の初めから取り組んでいた不平等条約の条約改正交渉の結果、1894年7月16日、最初の改正条約である日英通商航海条約が締結されたが、この条約締結を機に日本は日清戦争開戦へと向かうこととなった。

大日本帝国憲法制定の翌年10月30日には、教育イデオロギーの統一を図るため「教育ニ関スル勅語」（教育勅語）が公布された。1881年1月9日には、「内村鑑三不敬事件」といわれる事件が起き、社会問題化した。さらに東京帝国大学教授の井上哲次郎が『教育ト宗教ノ衝突』を著し、キリスト教信仰が近代天皇制の国家理念と相容れない反国家性を持つと非難し、キリスト教に対する社会の批判が強まった。一方教会内部でも、正統派神学を批判するユニテリアンの宣教師ナップやマコーレーらの「新神学」が盛んになるなど、混乱や対立が生じ始めていた。

山田幸三の日記は、国家主義的な傾向を強めていく時代の中で、一神学部生が記した日記である。日記には上記のような社会状況やキリスト教内部の諸問題だけではなく、明治学院神学部のカリキュラムの記述やへボン館での寮生活、地震・火事に関する記事、読書記録、日々の金銭出納の記録などが記されており、当時の明治学院の学生生活と社会を知ることのできる貴重な資料である。「資料集」として翻刻・刊行することにより、活用の機会が広がることを望みたい。



山田幸三が記した日記

山武市歴史民俗資料館所蔵

回顧談－沖繩からの留学－

屋我 良明*

私は1931年に台湾の台北で誕生しました。戦中を台湾で過ごした私が沖繩への帰郷を許されたのは1946年12月のことでした。沖繩に戻って高校を卒業した後、1950年から4年ほど、アメリカ軍関係施設での仕事に従事しました。沖繩では1950年に琉球大学が開校しましたが、優秀な若者をアメリカや内地の大学に進学させるため国費での留学生(国費留学生)と私費で留学させる私費留学の制度があり、内地の生活に憧れて沖繩を離れていく人も多くいました。私もそうした一人で、4年間ほど働いて、貯金もできたので留学する気持になりました。

1954年1月に上京して社会福祉学を学ぶのであれば明治学院大学が良いとの情報があり、どんな学校かと下見しました。重厚な校門、銀杏並木、左手にある校舎、チャペルに圧倒され、ここにしようと思いを決めました。



屋我さんが入学された頃の正門。回顧にある「左手にある校舎」は正面玄関のエンタシスの柱が特徴的な校舎で「井深ホール」と呼ばれていた(1925年竣工、1978年取壊し)。現在の高校体育館、本館付近にあった校舎である。

出願書類を取り寄せて、願書を書くときに願書に「宗教」を書く欄があり、考えた末に、沖繩では「祖先崇拜」が大事にされているからと、「祖先崇拜」と書いて出願しました。試験当日は学科試験があり、それに続いて面接試験がありました。細かいことは覚えていないのですが、面接での手ごたえがなかったので、「不合格」だと観念しました。でも、念のためと発表を見に行きましたら「合格」していたので、驚嘆するとともに、神様のお恵みに感謝しました。

入学して感銘を受けたのは、1時限目の授業が終わると、構内に讃美歌312番「いつくしみ深き」の音色が流れ、チャペルでの礼拝が持たれていたことです。私も、毎日、この時間にチャペルに通って讃美歌を歌い、先生の説教を聞きました。そのような中で、無教会派のクリスチャンの友人と出会い、色々と感化を受けました。

私はクリスチャンにはなりませんでしたが、今でも内村鑑三の「一日一章」を毎日読んでいますし、「いつくしみ深き」を、ふと気付けば口ずさんでいます。私にとって明治学院大学から受けた影響は大きいものでした。

また良い学友に恵まれ、楽しい学生生活を送ることができました。校歌碑の近くに座って、友人と語りあったことは、今も心に残る懐かしい思い出です。その学友たちとの交流は今も続いています。

余談ですが、当時、沖繩から本土に行く場合、パスポートが必要で、種痘などの伝染病の予防注射をし、手荷物検査も受けました。飛行機の便はなく、船で20余時間かけて鹿児島に渡り、1泊して、特急列車に乗り30余時間かけて東京に着きました。上京する時は、船便を確かめて行くので順調なのですが、夏休みの帰省時、船の出航日を確認して東京を発つのですが、鹿児島に着いたら、沖繩に台風接近で出航できず、宿代も不足して、公園で2日ほど過ごしたこともありました。



屋我さんが使用した「パスポート」。パスポート表紙には「琉球列島米国民政府」とあり、沖繩がアメリカ統治下にあったことを示している。沖繩がアメリカから返還されたのは、1972年5月15日のことだった。

明治学院歴史資料館展示室は現在〈屋我良明(やがりょうめい)氏寄贈資料紹介『沖繩からの「留学生」～1950年代半ばの沖繩と明治学院～』の展示を行なっています。屋我良明氏は第2次世界大戦後、アメリカ統治下におかれた沖繩から琉球列島高等弁務官が発給した「日本旅行証明書」(パスポート)を携えて、1954年4月に新制大学として発足して間もない明治学院大学に入学しました。今回の資料紹介を通して沖繩からの「留学」という時代があったこと、また、その時代を考えるきっかけとなれば幸いです。

このたびの資料紹介展示にあわせて、屋我良明氏より回顧談をいただくことができましたので、ニュースレターに掲載いたしました。

※やがりょうめい(1931-) 沖繩県在住 1954年4月文学部社会学科入学、1958年3月同学科卒業

(この文章は屋我さんからの聞き取りとご本人より頂いた回顧録をまとめたものです。)

明治学院歴史資料館 2019年度主な活動

文書・資料の調査・整理及び目録作成、デジタル化

所蔵資料の中から3,000点を目標に調査・整理を行い、あわせて目録を作成。(専門アーキビストへの作業委託による。)

所蔵資料の中から約400点のデジタル化。ガラス乾板写真については、クリーニング等保護処理をした。(専門業者による。)

資料の受贈

小堀一政氏 山岳部関係資料 1973年度冬山合宿遭難事故報告書他4点

高井道氏 現代英語教育研究講座全12巻(研究社出版/1964年6月刊行開始～1965年10月完結)

講演会・教育支援等

4月15日(月)～26日(金) 明治学院高等学校1年生フィールドワーク 展示室見学 304名

7月11日(木) 6限 三河内彰子先生「視聴覚教育メディア論A」(学芸員課程科目) 展示室見学・歴史的建造物3棟見学 20名

11月9日(土) 歴史資料館講演会「洋風建築の声を聴く－明治学院の歴史的建造物を学ぶ－」

講師：青木祐介氏(あおきゆうすけ、横浜都市発展記念館副館長・主任調査研究員) 参加者54名

12月10日(火) 5限 辻直人先生「明治学院研究2」 展示室見学・歴史的建造物3棟見学 14名

資料貸し出し等

東京都写真美術館の企画展「幕末明治を撮る 日本初期写真史 関東編」(2020年3月～5月開催)

明治学院第1回卒業写真他6点

全国大学史資料協議会東日本部会創立30周年記念展示(2019年10月～2020年2月開催)

明治学院大学大学案内 1954年度1点

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第16集

2020年3月刊行

山田幸三記「二榎日記」(明治26年)「今里日記」(明治27年)

本書では、1893(明治26)年から約4年間、明治学院神学部在籍した山田幸三(1873-1940)が在学中に記した2冊の日記のうち、2冊を紹介します。明治学院が白金の地に開校したのは1887年、神学部が築地から移転したのは1889年です。この日記には、開校直後と云っていい最初期の明治学院を舞台に、本学神学部で学んだ学生たちの生活や、学院の出来事、授業内容、学生たちが通った教会の活動などが、いきいきと記されています。当時の学院の様子やキリスト教伝道のありようなどを知ることのできる、貴重な資料です。

2019年度 歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長 長谷川 一 歴史資料館長(文学部教授)

委員 小川 文昭 図書館長(経済学部教授)

松本 一裕(文学部教授)

岡本 多喜子(社会学部教授)

植木 献(教養教育センター准教授)

秋山 智一郎(法人事務局長)

鈴木 直子(図書館次長)

岡村 淑美(明治学院高等学校教諭)

青野 由美(明治学院東村山高等学校教諭)

歴史資料館

研究員 辻直人 木村一

研究調査員 石崎康子 松本智子

事務局 安藤正明 小杉義信 松岡良樹 亀元円

明治学院歴史資料館 News Letter No.11

発行者 明治学院歴史資料館

発行日 2020年3月31日

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 電話:03-5421-5170

E-mail:shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp

http://shiryokan.meijigakuin.jp/